

エニシダが咲く坂道を

関原 斉子 福島県いわき市 五十五歳

エニシダが咲く短い坂道を。パタパタと下っていくのは、黄色い帽子をかぶった小学一年生の息子。黄色いエニシダの花に紛れてしまふような黄色い帽子を首を伸ばして見送った十六年前の朝。その息子が今年「教育実習生」として同じ坂道を下っていく。もうエニシダはなく、息子は黄色い帽子もかぶっていないけれど、大きくなった背中を見送る私の目には、エニシダが咲く坂道を。パタパタ下っていく小学一年生の息子が重なって見える。

夏の光の中、勢いよく伸びたヤブガラシの蔓を冠にして笑っているのは小学二年生の娘。ヤブガラシのオレンジ色のツブツブの花は宝石のよう。イヌタデの花束を持った無邪気な娘。その娘も今は大人になって、スーツ姿で働いている。髪を巻き、口紅を引く娘は、もうヤブガラシの冠もイヌタデの花束も興味がないが、オシヤレする娘を見つめる私の目には、あの夏の日に輝く、娘の笑顔が重なって見える。

自然の思い出はいいものだ。とりわけ緑の自然とのふれあいは、時を経て、なお鮮やかに人生に彩りを加えてくれる。

これからも私は、春が来るたび、エニシダが咲く短い坂道を。パタパタ下る小学一年生の息子を思い出すだろう。

夏が来るたび、ヤブガラシの冠をかぶって無邪気に笑う小学二年生の娘を思い出すだろう。

くりかえし、くりかえし、ほほえみと共に。